

〔資料〕

一枚摺の世界 — その小釈の試み (9) —

〔解題〕「おふだ」について (7) — 主夜神御影へその二〇

洛東獅谷白蓮社の鶴阿宝洲(元文二年(一七三七)没)が津軽外ヶ浜浄土宗始覚山本覚寺五世良船貞伝(一六九〇〜一七三一)¹⁾の行実をその七周追栄のために元文二年三月に洛陽書坊村上勘兵衛・澤田吉左衛門から寿桜した『貞伝上人東域念仏利益伝』上巻に、次のような話を載せている。校閲して示す。

讚州塩飽の船主長喜屋善四郎といへる者、年々商賣のため津軽に下る。享保八年癸卯の三月、大坂より發船し下りしに、津輕領深浦の沖にて俄に大難風に逢ひ、一船二十餘人の水主をのく、丹心に佛神に祈請しけれども効なし。船簸蕩してすでに危く見えし時、船主善四郎、去年の春今別の旅宿美濃屋忠右衛門に表具の事頼れし貞傳和尚の名号の事思ひ出し、頓てこれを取り出し船の表に懸け奉り、一船の諸人一心に声を發して念佛祈願せしかば、風波たちまち妥帖になり、難なく西の瀆岩崎といふ所へ着岸せり。善四郎並に二十餘人の舟子ども其宿忠右衛門を同道し早速本覚寺へ來り、彼名号をも持參し船中の事共具に申演て十念を受け、各拜謝してげり。

貞伝上人は漁民に魚根を教えて漁法を改良し、海中投石による昆布増殖法を教えて今別昆布の基礎を築いたすぐれた産業指導者であり、また農漁村民のために廢品金銅で弥陀小像一万余体を造って五穀豊穡・海上安全を祈請した希代の念仏行者であって、その名号は海上安全・安産・火防・虫害に効験利益があるとされて、今もこれを需め、上人を崇敬する遠近の衆庶は少なくない²⁾。宝洲が『貞伝上人東域念仏利益伝』に記しおいた右の讚州塩飽の船主長喜屋善四郎の話はまさに貞伝名号の靈験利益を示す現証譚で

関口 静雄・岡本 夏奈・阿部 美香

あって、宝洲はこれをめぐって該博な知識を私説として縷々記している。長文の一節を引用する。

私云、およそ渡海の人の祭る所の神天、一種にあらず。今唐船にて祭る船玉を天妃神と名く。觀音の化身なりといへり。仍て唐船の詞に舟玉の事を菩薩といふなり。永觀律師の拾因に千手經を引て、弥陀の名号ハ殆大陀羅尼の德にも勝れたりといへり。今弥陀の寶号を懸け、一船の人同音に念佛して惡風の難を免れし事、亦宜ならずや。因に三國に船を護る神天、その名を記して知らしめん。天竺の神には婆娑婆演底主夜神。これは唐譯花嚴經六十八張¹⁾にあり大疏六十八、晉譯經五十二張²⁾には婆娑婆陀夜天と説たり。四十花嚴經第七九には譯して春和神といへり。春主當神と訳せり。この主夜神渡海の難を守り給ふ事、匡房卿續往生傳³⁾、釋書五傳⁴⁾に見えたり。○唐にてハ第一媽祖⁵⁾。亦ハ姥媽共号す。薩摩國に野間權現といふハ、此船玉姥媽神を祭る也といへり。姥媽を天妃と諡す⁶⁾。具に西川如見の長崎夜話⁷⁾一、同作の華夷通商考⁸⁾二、并四に載たり。此菩薩天妃ハ本宋の興化府林氏の女、神となれりといふ説、剪灯新話注⁹⁾一八五、雜俎四¹⁰⁾ 同十五¹¹⁾、琉球神道記¹²⁾五三十一。等に出たり、天妃のみづから作り給ひし詩あり。珍説なる故に茲に記す。又海上の守とも成べし。大明の嘉靖十三年甲午の夏、琉球國封王の事あり。陳氏と高澄と一船の兩将なり。緊関といふ所にて、夜半に逆風おこりて楫おれ遮波板くづる。すなハち香を焚て天妃に祈る。時に天妃降箕¹³⁾。燒き清き箕を置く法ありこれなり。五して詩を灰の上に題して云、香風驚動海中仙。鑑爾陳高意¹⁴⁾。雜俎十五¹⁵⁾。誰遣¹⁶⁾異神¹⁷⁾撓¹⁸⁾海船¹⁹⁾。我施²⁰⁾陰隲²¹⁾救²²⁾官船²³⁾。鵬程遠大²⁴⁾力²⁵⁾思專²⁶⁾。麟閣²⁷⁾勲名待²⁸⁾汝²⁹⁾還³⁰⁾。四百人中多³¹⁾善類³²⁾、好將³³⁾忠孝³⁴⁾答³⁵⁾皇天³⁶⁾。と

果して風轉じて船恙なく閩に帰れりとなり。これ高澄が記する所なりと具に良定・琉球神道記^{五三}に記せり。又近世大清の李徳容といふ人、陰徳ありて船難を通れたり。船神媽祖娘々人に附て風神・龍王に命じて風波をしづめ給ひし事、唐話纂要六に記せり。見つべし。天妃を天配と讀む事。剪刀録話^二に天妃配といへり。猶妙幢浄惠律師・佛神感應録後集^{七五}に具に載れたり。○日本にて船魂の神といふハト部兼邦の神道百首和歌鈔下^{三四}に猿田彦神なりといへり。大田命興王神みな同名なり親房。卿元々集六、十五丁・廿九丁。備後國鞆津渡社これなり。神功皇后三韓征伐の時祀り給ふとなり。

等々と記し、永観律師の『往生拾因』に「千手経」を引いて弥陀の名号は大陀羅尼の徳にも勝れているというから、長喜屋善四郎が船の表に弥陀の宝号を懸け、乗員一同が同音に念仏を称えて悪風の難を免れ得たのももつともなことであるという。次いで宝洲は話題を転じて、およそ渡海の人の祭る神天は一種ではないとして天竺・震旦・本朝三国の船を護る神天について、すなわち天竺においては婆珊婆演底主夜神（婆娑婆陀夜天・春和神）、唐においては媽祖（姥媽神）、本朝においては猿田彦を挙げ、各神について依拠した文献をこと細かに示して詳述し、「婆珊婆演底主夜神の像、世にまれなり。故に茲に神像を附す」として一枚摺の神影ふだを紹介し、この主夜神像の由来については妙幢浄慧の『佛神感應録』後集三の記述が詳しく、また主夜神が悪夢・賊難・夜行怖れを除くことは「花嚴経」や『酉陽前集』^{五九}に見えると注記を加えている。

宝洲はさらに仏経の類を船に積みば竜神がこれを望んで難ありという俗説を信じて船主によっては仏経の積載を嫌う者があるが、それは大なる痴案であるとして、泉涌寺開山大興国師俊苜が入唐帰朝の時、大風によって八十余艘の船がみな砕けたのに、経を載せた船だけが損ずることがなかったこと、勢州蓮華谷蓮隨山梅香寺九世信知寅載上人が一切経を東奥相馬興仁寺に寄付せられた時、伊豆浦で難風に遭い連舟二艘が破船したが経を積んだ船は恙なかったこと、古今唐土から商船に載せ来る蔵典はみな難なく来朝したことなどを例示し、「処胎経」四を引いて諸仏の經典はみな龍宮にあり、却って龍神は守護を加えるのであって経を損することなどないと



力説している。

宝洲が世に希だとして示した右の婆珊婆演底主夜神の神影は、いづれ何某の社寺が出した神影ふだを模刻したものと思われるが、その出処を明らかにしていない。經典や参考書について執拗なほど出処を詳細に記す宝洲にしては不可解である。しかしこの婆珊婆演底主夜神の神影は前稿（本誌九年十一月）で紹介した宋人朱仁聡が敦賀に舶載し、大原山西福寺に襲蔵されていた婆珊婆演底守夜神の画像とはその制作の系統を明らかに別にするものである。

（関口静雄）

1 注

貞伝の没年は『浄土宗史本会』（『浄土宗全書』第二十卷所収）による。なお前稿でふれた妙幢浄慧の没年について西田耕三氏『近世の僧と文学』（二〇一〇年二月、ベリかん社）は駿河島田の白岩寺の位牌及び墓碑によれば享保九年（一七二四）二月十四日だが、浄慧撰『儒釈雜記』は享保九年九月の本多予州宛書簡の写しを記録しているという。また藤谷厚生氏「妙幢浄慧の戒律論について」（『印度學佛教學研究』五八巻二号、平成二十二年三月）は享保十年二月十四日とする。『貞伝上人東域念仏利益伝』下巻に「妙幢和尚は）本宗黄檗持律精嚴著述尤多也。称地藏ノ化、享保乙巳二月廿二日寂」とある。宝洲が何に依拠したものか不明であるが、浄慧の没年

を享保十年二月二十二日と伝えている。

貞伝上人のことは太宰治も小説『津輕』「本編 三 外ヶ濱」に、

今別には本覺寺といふ有名なお寺がある。貞傳和尚といふ偉い坊主が、この住職だったので知られてゐるのである。貞傳和尚の事は、竹内運平氏著の青森縣通史にも記載せられてある。すなはち、「貞傳和尚は、今別の新山甚左衛門の子で、早く弘前誓願寺に弟子入して、のち磐城平、專稱寺に修業する事十五年、二十九歳の時より津輕今別、本覺寺の住職となつて、享保十六年四十二歳に到る間、其教化する處、津輕地方のみならず近隣の國々にも及び、享保十二年、金銅塔婆建立の供養の時の如きは、領内は勿論、南部、秋田、松前地方の善男善女の雲集參詣を見た」といふやうな事が記されてある。そのお寺を、これから一つ見に行かうぢやないか、と外ヶ濱の案内者N町會議員は言ひ出した。

「文學談もいいが、どうも、君の文學談は一般向きでないね。ヘンテコなところがある。だから、いつまで経つても有名にならない。貞傳和尚なんかはね、」とN君は、かなり酔つてゐた。「貞傳和尚なんかはね、佛の教へを説くのは後まはしにして、まづ民衆の生活の福利増進を圖つてやつた。さうでもなくちや、民衆なんか、佛の教へも何も聞きやしないんだ。貞傳和尚は、或ひは産業を興し、或ひは、」と言ひかけて、ひとりで嘖き出し、「まあ、とにかく行つて見よう。今別へ来て本覺寺を見なくちや恥です。貞傳和尚は、外ヶ濱の誇りなんだ。さう言ひながら、實は、僕もまだ見てゐないんだ。いい機會だから、けふは見に行きたい。みんなで一緒に見に行かうぢやないか。」(中略)

「たいしたお寺でもないぢやないか。」と私は小聲でN君に言った。

「いやいや、いやいや。外觀よりも内容がいいんだ。とにかく、お寺へはひつて坊さんの説明でも聞きましょう。」

私は氣が重かつた。しぶしぶN君の後について行つたが、それから、實にひどいめに逢つた。お寺の坊さんはお留守のやうで、五十年配のおかみさんらしいひとが出て来て、私たちを本堂に案内してくれて、それから、長い長い説明がはじまつた。私たちは、きちんと膝を折つて、かし

こまつて拜聴してゐなければならぬのである。説明がちよつと一區切つて、やれうれしやと立上らうとすると、N君は膝をすすめて、(下略)

(初版、昭和十九年(一九四四)十一月、小山書店)

と記す太宰は竹内運平編『青森縣通史』(昭和十六年(一九四二)、東奥日報社)を引いて貞伝について一応の知識を紹介しているが、N町會議員ほどの関心もなく、門前で買った二尺の鯛をぶら下げて本覺寺を訪れる始末で、不在の住職に代わつて熱心に勤める夫人の説明も厭うばかりのように見える。太宰は「序編」末に「昭和の津輕風土記として、まづまあ、及第ではなからうかと私は思つてゐるのだが、」と記しているが、出版當時を知らぬ後年の一読者からすると、こと貞伝と本覺寺については到底そうは思われない。

22. 池宝山浄徳寺延命地藏尊御影

木版墨摺 三〇・一×一一・八cm
(宮島コレクション蔵)



右は山形県酒田市浄土宗池宝山浄徳寺に祀られる小野篁作という延命地藏菩薩像の御影札である。浄徳寺は天文十一年（一五四二）に京都知恩院の法誉が向酒田に創建し、のち現在地に移ったと伝わる。

延命地藏菩薩は延命・利生を誓願とし、新しく生まれた子を護り、短命・夭折の難を免れさせる。左足を垂下する半跏像が多いが、浄徳寺のそれは雲座に乗った立像である。右手に錫杖、左手に宝珠を持ち、衲衣の裾は少し広がっている。光背は輪光で、真上と左右には宝珠がある。上脛が直線で下脛が曲線という三日月に似た目、肉づきがよく質感を感じる耳、ふっくらとした丸形の頭など、平安時代にかけてよく見られる特徴を持つ。長沢俊樹御住職の直話によると、この像は尾崎某なる地元住民が海から拾い上げたものという。

酒田は室町時代、坂田または砂潟とも呼ばれ、最上川南岸の船着場として発展した港町で、寛文十二年（一六七二）、河村瑞賢が日和山下に幕府領米置場を建設し、下関・瀬戸内海を経て大阪・江戸へ至る西廻り航路を開拓してからは米の回漕拠点として栄えた。京都・大阪からの物資も、最上川を通じて山形・米沢・会津・仙台方面へ供給されたため、日本海側の交

易を一手に握って繁栄した。浄徳寺で毎年八月二十四日夜に行われる地藏盆も北前船によって京都から伝わったものとされ、上掲の御影札は地藏盆で授与された。

浄徳寺境内には虫歯地藏と呼ばれる地藏菩薩像も祀られている。順誉が有無良縁の菩提祈願のために建立したもので、台座に「享保十五年（一七三〇）八月二十四日」と刻まれている。ずんぐりとした身体つきの半跏思惟像で、曲げた右足を左膝ではなく蓮華座に置いている。右手は頬につけ、肘は右足に置かず宙に浮いており、左足は蓮華座を削ってそのまま垂らし、左肘は左足に置く。頬に手を当てている尊容が虫歯に悩んでいるように見えることから、この地藏菩薩に祈願すると歯痛が治ると信じられ、虫歯地藏と呼ばれるようになった。

歯痛治癒に効験利益がある地藏菩薩といえはあごなし地藏、特に小野篁作という島根県隠岐郡隠岐の島町上西の腮無地藏像が有名である。西廻り航路は鳥取県境港を経由したため、海の状態によっては隠岐に滞在することもあった。腮無地藏の霊験は江戸時代、海路を通じて全国各地に広まり、多数のあごなし地藏が彫像されて信仰の対象となったため、西廻り航路の寄港地であった酒田にも、腮無地藏像の霊験は伝わっていたに違いない。特に浄徳寺には腮無地藏像の作者である篁作の延命地藏菩薩像が祀られているのだから、頬に手を当てている姿から歯痛や腮無地藏像を連想するのは容易かったであろう。

酒田にはもう一つ、篁作と伝わる木像がある。寛永後期に創建された十王堂（酒田市二番町）の本尊閻魔王像である。『十王堂閻魔王御腹籠略縁起』（元禄九年（一六九六）版／浄徳寺蔵）をもとに記された、境内の『十王堂縁起』（平成二年（一九九〇）五月／浄徳寺三十二世静誉）によると、酒田の商人筑前屋与惣右エ門が水戸口（川口）を歩いていると自身の名を呼ぶ声を聞き、葦葦の中に入ると、名も知れぬ尊げな木像が漣に漂っていた。家へ持ち帰ると、その夜、「吾は閻魔王である。仮に横作の形像を残し、衆生を済度せんとす。早く吾を清浄の処に遷すべし」との夢告があったため、ひとまず菩提寺である浄徳寺に移した。そして清浄な別殿へ安置するために浄地を探し、寺社奉行に願い出て十王堂町の地を選び、御堂を建て

て遷座した。その後、京都の大仏師左近が出羽国に漂泊した折に霊像を拝し、「これ凡俗の作に非ず。小野篁の刀勢なり。かかる霊異の尊像をあらわに拝するは恐れ多きことなり」と自ら大像を彫み、海中より出現した尊像を腹の中に納めたという。左近が彫像した閻魔王像は右手に赤い笏を持った座像で、赤い身体に黄金色の衣を纏っている。



十王堂堂内¹

胎内に納められた篁作の閻魔王像は、海から拾われたという点が浄徳寺の延命地藏菩薩像と共通する。これらの仏像は海辺で見出されたということから、信仰を目的として北前船で輸送されてきたというより、上山市十日町の水岸山観音寺に伝わる篁の守り本尊という聖観世音菩薩像のように、酒田を訪れた人が仏像を誤って水辺に落とし、海に行き着いたものであろう。

このほか、酒田市の市条の八幡神社は元慶元年（八七七）に出羽国司の藤原朝臣興世が石清水八幡宮から勧請した神社であるが、一説には篁が勧請したとも伝わるように、京都から遠く離れた酒田のさまざまな地において、篁の存在を感じることができると考えられる。『尊卑分脈』に篁の子と伝わる良真は出羽郡司であり、平安時代の出羽国府跡とされる城輪柵跡は酒田にあった。そして良真の娘とされる小町も酒田を生誕地とする説があり、観音寺には篁が賊討伐のために出羽国を訪れたと伝わる。良真・小町父娘の存在は疑問視もされるが、酒田周辺では篁親子三代にわたって出羽国と関わりがあると考えられていたことが分かる。

また、酒田には西廻り航路の恩恵を受け、農地解放によって解体されるまで日本最大の地主と称された豪商酒田本間家がある。酒田本間家は鎌倉時代に佐渡国守護代を務めた佐渡本間氏の分家で、その栄華は「本間様には及びもせぬが、せめてなりたや殿様に」と謳われるほどであった。その佐渡本間氏は武蔵七党横山党海老名氏流の末裔、つまり篁の子孫にあたる

のである。酒田本間家が歴代にわたって収集した古典籍や古文書などを収蔵した酒田市立光丘文庫には『小野篁歌字尽』や『小野篁八十嶋かげ』が収められており、彼らが篁に関心を持っていたことが窺える。また酒田本間家には初代原光から受け継がれた「弱者救済」「地域貢献」の精神がある。それは、『日本文徳天皇實録』仁寿二年十二月二十二日条に「公俸所_レ當。皆施_二親友_一。」と記され、冥官として恩人や舅を救済した伝承を持つ篁と通じるものがある。

このように浄徳寺の延命地藏菩薩像と虫歯地藏像、十王堂の閻魔王像、酒田本間家の存在によって、小野篁と西廻り航路は強く結びついており、小野篁の存在は海を通して、京から遠く離れた地においても人々に語られていたのである。

（岡本夏奈）

【注】

1 酒田商工会議所作成『第三回酒田まち歩き「龍巖寺参上、開門！」〜晩秋の寺町散策』（平成二十五年十一月十七日）より転載。

2 黒板勝美編「新訂國史大系」第三卷所収（昭和十二年二月再版。國史大系刊行会）。

23. 義賢行者現見感得之圖

木版彩色 五一・三×二六・四 cm
江戸時代後期(個人蔵)



安政三年(一八五六)、行也房聖阿により開板された、義賢行者感得の阿弥陀如来二十五菩薩来迎図である。画部分には手彩色が施される。画中に義賢の六字名号を添え、画面の周囲を日課念仏の勤行において塗りつぶすための○印が縁取る。この図は、本誌八八号で紹介した「阿弥陀如来二十五菩薩来迎図並義賢名号」と兄弟関係にあたり共通した構図を有する一幅であるが、富士に修行する義賢行者が如来の来迎に預かる姿を写し留め、先に紹介した来迎図が他ならぬ義賢感得の図像であったことを明らかにする貴重な資料である。しかも、上部に開板の旨趣が義賢の略伝とともに掲げられ、下段には識語がしたためられている。

そこで、以下にその本文の翻刻を行い読点を付して、本図の由緒を紹介するとともに、この図に象られた義賢の宗教空間を読み解いてみよう。

「上段」

義賢行者は出羽國村山郡観音寺村の産なり。幼より孝行の志、他にことなりけるとぞ。曾て父母世をはやうせしものち、しきりに浮生の無常なるに驚き、かつは考、妣の菩提のため、かつは自他出離の爲にとて、忽、發心し、唯唱念佛の行者とはなり申されし。かくて善光寺より象頭山、大峯、又ハ紀伊國の友ヶ島、富士の高嶺など登らぬ海山もなく修行せられける。つひに天保十一年十二月六日、越前國森巖寺にて往生の素懐を遂たまひし。法號を常蓮社行譽上人唯一心阿弥陀佛義賢大行者と申。貧道ひと、せ随従の因有によりて、彼富士山にて感見せられし聖衆来迎のよそほひを寫て、普く有信の人々に印施し、こたび行者の遺徳報恩の一端に擬ものなり。されば、深信唱佛の同行衆共にかくのごとくの迎接にあづかり、臨終正念に一蓮託生の善縁をむすばんことを冀ふなむ。

「画中」

靈山と聞て 登らは何もなし
こゝろにいつる 五々の来迎
南無阿弥陀佛

「下段」

義賢行者現見感得之圖

吉水ノ流ヲクミ念仏ヲ行セン人ハ、常ニ 上人ノ一枚起請、ナラヒニ法語心ニカクヘシ。若又イトマアラハ、御傳語灯録三部抄ヲ見テ、安心邪ナキヤウニ深く慎ムヘシト古徳モノ玉ヘリ。日課念仏相續ノ人々ハ現生護念ノ益ヲ蒙リ、正念ニ往生ス。又ハ亡者追善ノ為ニモ念仏シ回向スレハ、悪趣ヲマヌカレ解脱ヲ得セシムルコト疑ヒナシ。爰ニ、紀州鳴瀧堪忍院ハ義賢行者ノ遺跡ユヘ、予此圖ヲ梓ニ鏤メ、諸人念仏結縁ノ為ニコレヲ寄納ス。実ニ念仏ノ尊キコトヲ深く信シテ、只助給へ。南無阿弥陀佛

安政三丙辰孟春

南勢常行窟 行也房聖阿謹識

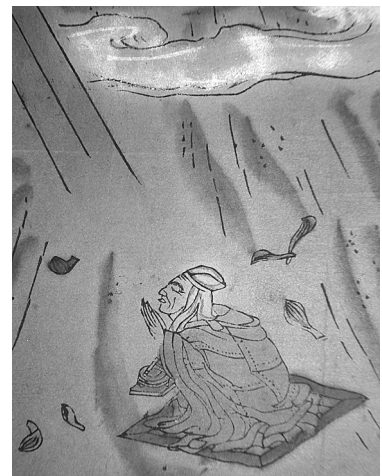
上段と下段の本文は、一方が総ルビを付した平仮名交じり文、一方がルビのない片仮名交じり文で記され対照的である。その内容を見てみると、上段には義賢の略伝が開板の旨趣を語る発願の詞とともに記され、下段には日課念仏を勧める趣旨文が識語として記されている。

上段の略伝によれば、義賢行者は山形県観音寺村の出身で、父母の菩提を弔うため、また自他の救済を願い発心して唯唱念仏の行者となり、善光寺（長野）から四国の象頭山（香川）、大峰（和歌山）、友が島（和歌山）、富士山など数多くの海山に修行し、天保十一年（一八四〇）十二月六日、福井県森巖寺にて往生を遂げたという。

名だたる霊山で修行した義賢は、各地で十念や日課念仏を授けている。

当時の記録からは、義賢が紀州徳川家や尾州徳川家から篤い帰依を受けたばかりか、行く先々で民衆の熱狂的な歓迎を受け、徳本行者に勝る人気ぶりであったことが知られる。画部分の左・右・下を棹取る〇印は、義賢から日課念仏を授かった人々が念仏の実践において用いるものであるから、その意味において、本図は念仏行者義賢の精神を版に写し取り、受け継ぐための図像であるといえよう。肝要なのは、そこに義賢自身が富士山で感得した阿弥陀如来と聖衆来迎の儀を写し取り、諸人結縁のために印施したという由緒である。これを開板した行也房聖阿の伝記は詳らかではないが、義賢の略伝に続けて「ひと、せ随従の因有」と記されることから、義賢の修行に同行して念仏を相続した人物であったことが知られる。聖阿は義賢の遺徳を偲び、開板した版木を義賢の遺跡である紀州鳴瀧の堪忍院に奉納し諸人に広く印施して、念仏を勧めたのであった。下段の識語には、「吉水の流れ」すなわち法然の教えのもとに念仏を行うものは法然の一枚起請文と法語を常に心がけること、法然の御伝や語灯録ならびに三部仮名抄を読み、弥陀の本願を頼み往生を願う「安心」の心が穢れぬようつとめること、さらに日課念仏を相続する人は「現生護念」の利益を蒙り正念往生が叶うこと、またそれは亡者追善の廻向にもなると説かれている。

この由緒を踏まえて本図を見れば、富士を背景に、座具を敷き、念仏の鐘と鐘木を前に置いて合掌礼拝する僧侶こそ、富士山に籠り修行する義賢である。そのすがたは生前の義賢をよく伝えるものと考えられ、肖像画と



右上: 義賢（部分図）
 左上: 義賢肖像
 （黒部市光明寺所蔵）
 右下: 善導と法然（部分図）

比べても同一人物と察せられる。そのもとへ来迎する阿弥陀如来は二十五菩薩を伴っているが、前列には善導と法然もともにあらわれている。念仏の行者にとって、念仏相続の系譜は重要な意味を持つ。たとえば、法然の場合、浄土教の祖である善導大師（六一三〜六八二）が夢の中にあらわれ、法然と向き合い、その専修念仏を讃えたという。それは、法然の念仏が善導から証誠された瞬間であり、浄土宗ではこれを開宗の時として重んずる。法然が夢のなかで見た善導は、腰より下は金色にして腰より上は墨染であったといわれ、半身金色の祖師像が法然感得の図像として『法然上人絵伝』（四十八巻伝）を代表として繰り返し描かれ、彫像された。本図において来迎する善導も、法然感得の半身金色の像である。そのすぐ後ろに法然は、

月輪に乗り、勢至菩薩の化身としての相をあらわしている。これら両祖師が阿弥陀如来や聖衆とともに来迎するすがたは、この図を見る人々に、義賢は阿弥陀如来が認める念仏行者であり、両祖師にも認められその念仏を受け継ぐものであることを、一目で理解させたことだろう。何より重要なのは、その念仏の空間が富士を舞台とすることである。先に紹介した「阿弥陀如来二十五菩薩来迎図並義賢名号」も、富士山を背景に来迎する弥陀如来と聖衆の姿を描く。ほぼ共通する構図を用いながら、弥陀の光明が照らす先には臨終を迎える往生人と枕元で善知識をつとめる義賢のすがたを描き、弥陀の来迎に預かり正念往生を遂げるその儀礼空間は、富士山と繋がりがあっていった。義賢の念仏は、富士の神のもとで感得された念仏であり、富士山こそはその救済のシンボルなのである。

義賢による富士修行の内実は明らかではないが、伊藤曙寛氏によって、天保九、十、十一年（一八三八～一八四〇）のころの修行をまとめた日誌が富士山麓の神社に所蔵されているとの報告がなされている⁵。また『唯念行者伝』⁶には、それより前の文政十一年（一八二八）の段階で、木食唯念（二七八九～一八八〇）が富士山に登り、義賢と対面して念仏勤修に励んだとの記録が見える。唯念の『伝』によれば、このころ既に富士に修行する義賢のもとへ念仏行者がその念仏を請い受けにいくほどに信仰を集めていたことが知られる。『伝』はまた義賢を「念仏三昧発得の人」であったと讃える。義賢にとって、三昧の境地に至り弥陀来迎のすがたを感じた霊場こそ富士山であり、そこで目の当たりにした弥陀来迎のすがたを描いたのが本図であったといえるだろう。そうした義賢にとっての富士修行の意義を、次に木食聖の系譜からも考えておきたい。

義賢（一七八五～一八四〇）は、弾誓（一五五二～一六二一）や但唱（一五七九～一六四一）、澄禅（一六五五～一七二二）、徳本（一七五八～一八一八）の系譜に連なる浄土宗捨世派の木食聖である。その系譜のなかで、富士山において念仏三昧発得を願い、そのすがたを感得した木食聖として特に注目されるのが澄禅である。澄禅は木食弾誓の遺風を受け継ぎ、故地である浄発願寺（伊勢原市）や塔峰阿弥陀寺（箱根町）に修行し、晩年は古知谷阿弥陀寺（京都市）で過ごし入寂した稀代の念仏行者である。その伝記によ

れば、澄禅は弾誓の草創した塔峰阿弥陀寺で修行する折、富士を遠望し「大身の阿弥陀如来」を目の当たりにしたいと願って、九月中旬に富士に登臨し、すでに雪が吹き上げるなかで石室に籠もった。絶命寸前の状態に陥ったとき、一滴の甘露が口に入り、念仏の音が口を継いで飛び出し口称に励んだ。すると空中に宝橋が現れ、容顔美麗な童子が己を招く。宝橋の上に進むと、宝橋は澄禅を載せたまま飛び去り、気がつけば目の前に富士山の倍も大きい、「大身」の弥陀如来が蓮華座に座し、光明赫奕として、上人の頂きを照らしたという。喜びの涙を流し合掌礼拝する澄禅に、弥陀如来は微笑し説法をたれた。澄禅が歓喜の絶頂に達したとき、突然に地に落ち、気付けばそこは塔峰であったという⁷。

澄禅による富士山における見仏の奇瑞は今日あまり知られていないが、当時の人々は澄禅の伝記やその掛幅絵伝を通して良く知るところであったろう。その澄禅を慕って旧地を参詣し、澄禅庵を不断念仏道場として中興したのが徳本であり、その徳本を慕い北陸にも巡錫して念仏布教を行い、数多くの名号碑を残したのが義賢である⁹。大鋸文書（天保十一年九月二十五日条）には、金沢城下に到着した義賢が、徳本行者の安置した阿弥陀尊像と仏舍利を錦の袋に入れ、片時も離さず持って裸足のまま矢を射るように歩行していたことが記されている¹⁰。義賢がいつでもどこのように徳本の阿弥陀尊像と仏舍利を請い受けたのかはわからないが、徳本の在世時と義賢の活躍時期は重なり合っていることから、徳本の念仏を義賢が相続していた可能性も考えられてよい。少なくとも、徳本ゆかりの阿弥陀尊像と仏舍利を肌身離さず持って修行する義賢のすがたからは、その系譜に列なる念仏行者として人々に念仏を授ける義賢の姿勢が垣間見える。その徳本が慕った澄禅の富士山における阿弥陀如来の見仏の奇瑞は、義賢もよく知っていたはずである。澄禅にとって、富士山見仏は念仏三昧発得のものであった。それは義賢にとっても、目指すべき境地であったに違いない。

加えて、澄禅の感得した弥陀如来が「大身」の相をあらわしていたことも注意しておこう。なぜなら、大身の弥陀如来感得の系譜は、弾誓に繋がるからである。『弾誓上人絵詞伝』によれば、弾誓は佐渡檀徳山の岩窟に籠もり、念仏三昧の行を修するなか、報土の有様を目の当たりにする。そ

のとき、教主である弥陀如来は「大身」を現じて「微妙の法」を説いた。如来は弾誓に授記して「十方西清王法国光明滿正彈誓阿弥陀仏」と呼び、説法を書記して彈誓経（六巻）と名付けたという。

この彈誓の弟子となり念仏を相続した但唱は、修行中に感得した阿弥陀如来像を描き残している。滝の上にあらわれた阿弥陀三尊のすがたはひとさわ大きく、「大身」の像そのものである。『江戸名所図会』には、但唱が信濃の檀特山に籠もり念仏三昧を發得したとき、向かいの峰に三尊の影向を拝んだといい、そのすがたは「はなはだ大にして虚空に満ち」たという。「大身」の阿弥陀を感得した但唱も富士山で修行をしており、『但唱伝記』には、但唱が毎年怠らず富士に禪定し、そのたびに弥陀の来迎に預かったことが記されている。¹²⁾

このように見れば、富士山における義賢の念仏空間は、大身の弥陀を感得する木食の系譜に連なるものであったことが見てとれる。とりわけ、澄禪の富士山におけるシャーマニスティックな脱魂体験は興味深く、義賢の富士山見仏の先蹤としても注目される。阿弥陀如来の光明に頂きを照らされた澄禪が弥陀から説法を受けたのと同じように、義賢もまたその光明に照らされながら、弥陀や両祖師から聖なる教えを受けていたかもしれない。その奇瑞の瞬間を版にあらわしてみせたこの図は、善導や法然から相続し、富士に修行する木食たちの系譜に連なる義賢の念仏を過去現在未来の衆生に勧めるために印施するものであった。義賢の六字名号は、御影や念仏札、名号石に象られ、いまなお各地に存して行者の存在が記憶されている。本図はそうした義賢行者の念仏の核心を支える感見図であり、その精神を受け継ぎ念仏を相続する人々にとっての、来迎の本尊であった。

（阿部美香）

【付記】本稿は JSPS 科研費 (15K02225) の助成を受けた研究成果の一部である。

【注】

1 龍谷大学図書館所蔵。「一枚摺の世界―その小釈の試み(3)」、『学苑』八八

八、二〇一四年)のなかで紹介した。

2 かつて森巖寺から真照寺を経て移された義賢の墓が、福井市にある浄土宗教会にあることが、伊藤曙覧「義賢行者伝」(『越中の民俗宗教』岩田書院、二〇〇二年)に報告されている。明治二十九年に再建されたものだが、高さ四メートルを超える墓碑の正面には義賢の「南無阿弥陀仏」の六字名号が刻まれ、裏面に「定運社行誓上人一心阿義賢大行者」と記す。その法号は本図の略伝の記述と一致する。天保十二年十月に福井町に入った義賢は泰澄ゆかりの越知山で修行し、体調を崩して森巖寺に入り、五十四歳にて示寂したとの伝えが残るといふ。

3 福江充『義賢行者当峯山籠中復覆』―木食聖義賢と芦峯寺一山―(『富山史壇』一三八、二〇〇二年)、大鋸文書(『加賀藩史料 第十五編』)天保十一年九月二十五日条、『應響雜記 上』天保十一年九月条など。

4 黒部市光明寺所蔵、尾田武雄『とやまの石仏たち』(桂書房、二〇〇八年)五九頁に「義賢」の事蹟とあわせて本画像が掲載されている。

5 前掲注2伊藤論文。また義賢は、ひとたびは富士での入定を目指していたという(遠藤秀男『富士山の謎』大陸書房、一九七四)。なお、富士山資料館で開催された平成二八年度特別展「富士山信仰と御師・登山道」展では、富士山における義賢の修行と関わる天保十年(一八三九)の文書が紹介されている。

6 『明治往生伝』(『近世往生伝集成二』)所収、山川出版、一九七九年)柴田六五郎編『復澄禪和尚行状記』(南無山房、一九八二年)、信楽院大松寺所蔵『澄禪上人絵伝記』(関口静雄「滋賀県信楽院大松寺所蔵木食澄禪上人関係資料」『学苑』九〇一、二〇一五年)参照。

7 前掲注7関口資料紹介解題参照。
8 芝田悟「加賀・能登における念仏行者の足跡―近世後期の徳本・義賢行者名号塔から―」(石川県教育委員会編『信仰の道』第四章第四節、一九九八年)。
9 『加賀藩史料 第十五編』(清文堂出版、一九四二年)所収。

10 正願寺所蔵「阿弥陀三尊像」。宮島潤子『謎の石仏』(角川書店、一九九三年)、品川区立品川歴史館特別展図録『大井に大仏がやってきた!―養玉院如来寺の歴史と寺宝』(二〇一三年)。

12 『江戸名所図会』『但唱伝記』ともに前掲注11図録掲載「史料釈文」を参照。

(せきぐち しずお 歴史文化学科)

(おかもと かな 大学院生活機構研究科生活文化研究専攻(二年)

(あべ みか 歴史文化学科)